



体験活動プログラムの考え方

～ 自らの可能性に気づき、能力を磨き、未来に向けて
チャレンジすることができる青少年の育成を目指す ～

目次

- 1 体験活動プログラムの考え方
- 2 未来に向けてチャレンジする力を培うには
- 3 なぜ、「豊かな心と志を持つたくましい青少年」を育成するのか？
- 4 どんな資質・能力を高めれば良いのか？
- 5 何をすれば、資質・能力が高まるのか？
- 6 大人はどのように子どもに関われば良いのか？
 - ①子どもに必要な資質・能力をはぐくむ活動内容
 - ②大人の「子どもへの関わり方」

I 体験活動プログラムの考え方

[前提]

- 将来、社会を生き抜く資質能力を身に付けた大人になるためには、子どもの頃から様々な活動に挑戦し、多様な経験を重ねていくことが必要。
- そのためには、周りにいる大人が、子どもの生活環境の中に、意図的、計画的に多様な体験の場や機会を作っていくことが大切。
- 青少年アンビシャス運動で培った体験活動を行う際の考え方を発展させながら継承し、自らの可能性に気づき、能力を磨き、未来に向けてチャレンジすることができる青少年を育成する。

1 体験活動プログラムの考え方

「未来に向けてチャレンジする力」を培うために、
子どもを取り巻く大人が意識すべき考え方

- 子どもが自分でできること、すべきことは子どもに任せ、手を出し過ぎない。
- 子どもが知らないこと、体験していないことはきちんと「教え」、「任せ」、温かく「見守る」。
- ルールに反する行動や危険な行動をしたときは、きちんと叱り、諭す。
- その子なりの努力を認め、誉める。
- 子どもの世界（子ども社会）を大切にする。

2 未来に向けてチャレンジする力を培うには

「目指す青少年像」

自分自身を大切にした上で、相手のことを尊重し、互いの多様性を認め、思いやりを持って社会的な自立を果たせるよう「豊かな心と志(アンビシャス)を持つたくましい青少年」

豊かな心

- 誇り
- 思いやり
- 尊重
- 多様性を認める



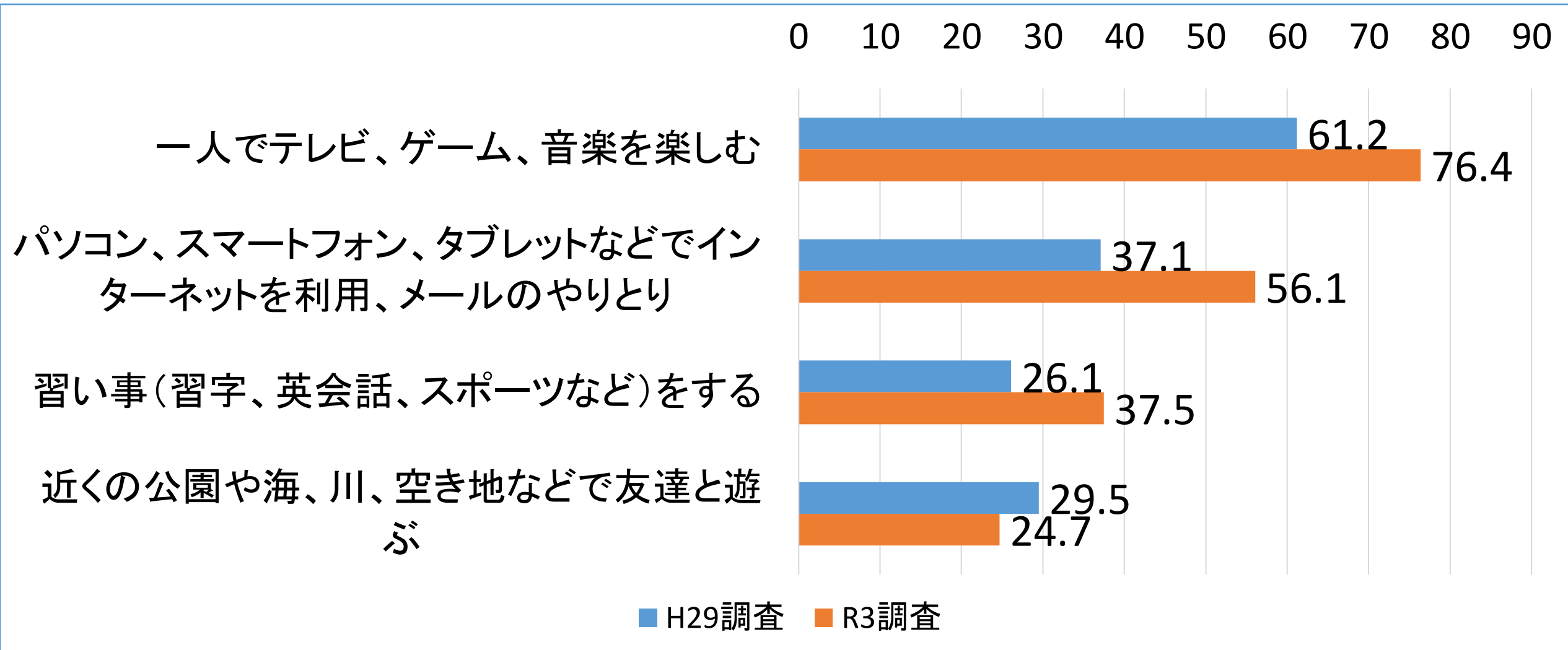
志(アンビシャス)

- 将来への夢
- 自分の目標
- 困難な状況を克服



(参考①) 学校が休みの日にすること

単位：%



(参考②) 日本の子どもたちの現状

子どものおかれる環境

習い事・塾
→多忙

※大人も忙しい

ゲーム・TV・YouTube・SNS

身体に現れる傾向

肩こり

アレルギー

よく転ぶ

不眠

すぐ疲れる

汗をかかない

子どもが自分で感じ、考え、遊ぶスペースが少ない日常

生身の経験がないまま成長してしまう

3 なぜ、「豊かな心と志を持つたくましい青少年」を育成するのか？



不登校、いじめの件数増加



情報化社会の進展による悪影響



ひきこもり、ニート、貧困、内向き



社会を
生き抜く力
の育成

4 どんな資質・能力を高めれば良いのか？

①人間関係能力

- 他人と協調したり、コミュニケーションを図る力

②基本的な生活習慣・技能

- 日常生活を営む上で必要な基本的な習慣や生活技能

③自主性・自律性

- 自ら進んで物事に取り組む態度や自己を抑制する力

4 どんな資質・能力を高めれば良いのか？

④耐性や体力

- 困難を乗り越える我慢強さや健康・体力

⑤役割意識や責任感

- 自らの役割を認識し、責任をもって成し遂げる能力

⑥思いやりの心

- 人に対するやさしさ、他人を大切にする気持ち

5 何をすれば、資質・能力が高まるのか？

「体験活動」

生活体験活動

- 調理活動
- 合宿活動
- お手伝い など

自然体験活動

- キャンプ(登山、テント泊など)
- 昆虫採集、天体観測、海水浴
- 自然物を使ったクラフト など

社会体験活動

- 職業体験
- ボランティア活動
- 勤労・生産活動 など

多様な人との交流活動

6 大人はどのように子どもに関われば良いのか？

①子どもに必要な資質・能力をはぐくむ活動内容

人間関係能力 を高める活動

- 多様な人との交流活動
- 他人と協調しながら生活する共同生活体験
- 遊びを通じた異年齢集団活動
- 自分の考えを伝えたり、人の話を理解する話し合い活動

生活習慣・技能 を高める活動

- 家庭での手伝い
- 集団生活体験の中で、買い物、食事の準備・片付け、掃除、洗濯など日常生活に関するすべての作業を共同で行う活動(通学合宿)

6 大人はどのように子どもに関われば良いのか？

①子どもに必要な資質・能力をはぐくむ活動内容

自主性・自律性を高める活動

- プログラムを企画する活動
- 子どもが創意工夫する活動
- 規律ある行動や生活が必要な目的的な集団訓練活動
- 自ら選択した職業体験活動

耐性や体力を高める活動

- 長期キャンプ等での不自由な生活や自然の中での厳しい協働作業など困難を伴う活動
- 登山や長距離歩行など、体力、気力の限界に挑戦する活動

6 大人はどのように子どもに関われば良いのか？

①子どもに必要な資質・能力をはぐくむ活動内容

役割意識や
責任感
を高める活動

- リーダーとしてチームをまとめる活動
- 与えられた役割を最後までやり遂げる活動
- 動物の飼育や植物の栽培活動

思いやりの心
を高める活動

- 地域の環境保全的な活動
- 福祉施設等への訪問や高齢者、障がい者の支援活動
- 年下の子どものお世話をする活動
- 保育所等で乳幼児と触れ合う活動

6 大人はどのように子どもに関われば良いのか？

②大人の「子どもへの関わり方」

活動前

- 事故防止、安全対策については最大限の注意を払う。
→ 事前の下見、道具の不具合はないか 等
- 子ども自身の危機管理意識・能力を高める。
→ 「自分の命は自分で守ること」を伝える 等
- 活動の準備や内容に関して、子どもたちが自分たちでできることやすべきことは、できるだけ子どもたちに話し合わせ、判断を任せる。
- 活動に際し、便利な道具や素材をあまり用意しすぎない。

6 大人はどのように子どもに関われば良いのか？

②大人の「子どもへの関わり方」

活動中①

- ・実際に「仕事」をしたり、「役割」を果たしたりする機会を豊かに与える。
- ・少々の失敗や挫折に対しては、あまりかばい過ぎない。
- ・子どもが自分でできること、すべきことは子どもに任せ、手を出し過ぎない。
- ・子どもが知らないこと、体験していないことはきちんと「教え」、「任せ」、温かく「見守る」。大人（指導者）には「待つ」という忍耐力が望まれる。

6 大人はどのように子どもに関われば良いのか？

②大人の「子どもへの関わり方」

活動中②

- ・「あれはいけない」、「これはダメ」と子どもの自発的行動を必要以上に制限しない。
- ・ルールに反する行動や危険な行動をしたときは、きちんと叱り、諭す。
- ・その子なりに頑張り、良いことをしたときは、きちんと認め、ほめる。
- ・子どもの世界(子ども社会)を大切にする。子どもたちに交流の輪が広がり、仲間関係ができていたら、大人はそっと身を引き、温かく見守る。

6 大人はどのように子どもに関われば良いのか？

②大人の「子どもへの関わり方」

活動後

- ・子どもに活動を振り返らせ、成就感や自己有用感(「自分は役にたっている」)を持たせる。
- ・活動後、身につけた力を定着させるためにも、活動内容や成果を保護者や教職員に伝え、家庭や学校でのフォローをお願いする。
- ・大人はそれぞれの活動の場で、体験活動プログラムの考え方に沿って子どもとの関わり方を実践していく。

天性を見出し 育成に努める

